2-6

学校名　：芦屋市立山手中学校
担当教科：英語
氏　名　：田尻 伸子

1　海外研修について

（１）　良かったと感じた（期待に応えた）海外研修の内容について（上位３つ）

① ＨＩＭＭＡＴＡ(スラム街で活動している現地ＮＧＯプロジェクト現場)訪問

⇒個人旅行では絶対足を踏み入れられない、または、一人で入っていっても決して歓迎はしてもらえないであろう所での感動的出会い

② ゲシアン村訪問

⇒小学校での大歓迎ぶり、校舎、教室、授業風景、先生方との意見交流、ホームビジットの家庭とホームステイ家庭との比較が興味深かった。子供たちの目の輝きは忘れられない。地道な支援。

③ ホームステイ

⇒一般家庭での一夜は貴重な体験、料理、教育、青年海外協力隊員が入っている中学校と入っていない学校との比較。イスラム教圏でのカトリック系私学への訪問。

（２）　収集した資料／教材について

・人との出会い、つながり、名刺、アンケート
　継続的に交流するためには、興味を持って窓口になってくれる人が欠かせない。
　英文レターや、生徒作品を交換できるための「人」とのつながり
・教科書（中２英語数学）、問題集（英語）、高校歴史教科書（日本占領時代の記述あり）
・写真　学校：校舎、生徒、制服、掲示物、教室、授業風景、板書、生徒のノートなど
　　授業料納入書、購買部、校内の祈りの場（教室）、校内の祈り前の足洗い風景
　　家庭：家、台所、寝室、居間、トイレ兼水浴び場（風呂場）、料理風景、
　　冷蔵庫の中、ごみ箱、炊事場、プロパン、換気扇、台所調味料、台所用品など
　　その他：建物内の祈りの方角マーク（天井、コーランの入っている引き出し内）、日本製のトイレットペーパーフォルダー、日本製のタオルかけ
　　市場、水田・稲刈りの風景、ジャカルタのビル街、ジョグジャカルタの町並み（ホテルの窓から）スーパーマーケットの店内（商品陳列の仕方、日本語付き商品、レジ風景）、高級ショッピングマーケット（ブランド店街）、バナナの花と実、パパイヤの木
・その他　バティックで使うロウを垂らす道具、今と昔（戦前、戦後、現在）の同じ場所絵葉書、コーラン、バティック、影絵の人形、麻袋再利用のバック、石鹸とストローで作った飾り花、ハラルマークつき菓子包み、インドネシア語のまんが

（３）　授業／学校生活への活用について

・写真を整理し、あくまでも「私が出会ったインドネシア」として紹介
・「インドネシアに友だちを作ろう」というテーマに沿って、英文レターやビデオレターなどの作成、インドネシアで出会った学校や人たちに実際に送付
・理想は年に数回でも、生徒間での美術作品などの送付交流

（４）　研修に関する全般的な所感／意見について

多くの人との出会いが、これまでの自分の概念の浅はかさに気づかせてくれ、今後の教育の在り方を再構築する良き機会となった。

・「感謝」の一言である。
・参加者に選出していただいたこと
・このメンバーで行けたこと
・多くの方々の支え、出会い、感動のあった研修だった。
・体調管理の大切さ

・自己管理不足の反省
・時間的拘束の長さ、過密スケジュール（それだけ内容が盛りだくさんで充実していた。）

2　来年度研修へ向けて　～さらに充実した研修のために～

（１）　事前研修
・第１回事前研修については、意義があり、日程的にもちょうどよかった。
・旅行業者の資料と主催者側からの資料に重複があり、あとから整理するときに紛らわしい。
・第２回事前研修については意義あるものでしたが、研修としては１７時には、全体会は終えるべきだと思う。

（２）　海外研修について
・「相手」がある研修であるのに、日本側の要求、個人的なお願いを多く取り入れていただき、インドネシア側との調整が大変だったと思う。
・同行者２人は、疲労や感情を表に出さず、冷静に全体がスムーズに気持ちよく実施されることに徹底されていました。
・個人旅行では決して足を踏み入れられない場所での人との出会いは、心から感動し、今まで「見ようとはしなかった」「避けてきた」物事に対して、正面から小さな一歩を踏み出そうという思いに、自分自身の気持ちが変化したことは、本人が一番びっくりしている。実体験というのは、生徒にも大人にも重要だと痛感した。
・参加者の皆さんとの交流は、さらにかけがえのないものとなった。

（３）　今後の本研修参加者へのアドバイス
・個人としての目的を明確にすること
・集団行動であることの自覚
・体調管理と自分から休息を申し出る決断（自己の反省をこめて）
・「相手＝インドネシア側関係者」の存在のもとで実施できている感謝の気持ち
・こちら側の要求、価値観を押し付けず、いかに希望を「相手」に伝え理解していただく努力をする積極性（覚えたてのインドネシア語をどんどん使うこと）

3　各訪問先の所感

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと ⇒それを何につなげるか？／その他所感
7月31日	ＪＩＣＡインドネシア事務所	・安全確保がこんなにも必要なのかと実感 ・ＪＩＣＡ事務所の設備の立派さにはまるで日本にいるような錯覚を覚えた。 ・インドネシア人職員の控えめかつ気配りの利いた対応に、インドネシアの人への関心が高まった。 ・上記のインドネシア人職員が私にとっての初「インドネシア人」の印象＝自分はこれから出会う人の前では「日本人」代表。気を引き締めて行動しようと思う。
	インドネシア大学 日本研究センター	・女性の社会で働く条件を日本ももっと整えるべきだ。 ・産前産後、育児中の働き方については、子育てへの周囲の理解を求め、社会全体で支援する必要性がインドネシアの方が整っている。 （ただし大学職員の場合であるから、必ずしも一般的な女性に当てはまらないだろう。）

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと ⇒それを何につなげるか？／その他所感
8月1日	生物学研究センター	体調不良のため欠席
	ストリートチルドレン更正施設	
	ＪＩＣＡ関係者との意見交換会	・住んでいる土地を好きになること＝理解への第１歩 そこから今この土地で、隣にいる人は何が必要で、自分は何ができるのかを考え、行動へとつなげられる。
8月2日	インドネシア語教室	・語学の授業は、その言葉で、少人数でと、生徒の立場からも改めて実感。 ・教師の笑顔で、生徒は安心して間違っても発言できる雰囲気が作られる。
	ホームステイ	・母親が家事全般を引き受けているのは、日本と同じ。 ・おもてなしの気持ちが随所に感じられ、ありがたかった。 ・水浴びは、初めの数回は震えたが、慣れたら思い切ってやってよかった。気持ちよかった。 ・台所の清潔さ、主婦としての誇り。 ・生ゴミ回収は希望すれば毎日でもしてくれる。
8月3日	文化体験教室 「バティック （ろうけつ染め）」	・「伝えよう」とする気持ちは生徒の「理解したい」という気持ちにつながり、相互理解が可能となる。 ・インドネシアの太陽のもとでは、はっきりとした色の組み合わせが美しい。伝統文化や伝統工芸は、その土地に合っているから生まれる芸術だと実感した。
	市場見学・書店	・市場は土地の生活を垣間見られる絶好の場 ・土地の生活を匂い、視覚、聴覚、味覚、触覚：５感を使って体験できる市場 ・日本の中学２年生英語の教科書に出ていた「アジアまんがサミット」の話題に納得 ・日本の漫画文化の進出パワーはうわさ通りすごい。 ・品そろえの多さは日本の５倍→その商品の山から、気に入ったものを見つけ出す人々のパワーは日本の１０倍
8月4日	ゲシアン村小学校 日本文化紹介	・準備したもの、したことも状況判断して、臨機応変に対応すればよかった。 ・日本で自分が文房具をもっと大切に扱うべきだと反省 ・小学校の先生は日本もインドネシアも女性が多いのか。 ・新しいもの、未知なるものへの関心の高さ ・日本の学校のトイレも生徒が掃除はしているが、せめて年に１度は消毒を兼ね業者清掃依頼をするなど、もっと衛生的にすべきだと思う。
	ホームビジット	・客人を精一杯もてなしてくれた気持ちがうれしい。 ・どこの国でも中高生は同じだ。 ・ペットボトルの水を用意して持っていたけど、せっかくのおもてなしの料理や飲み物を前に、鞄からペットボトルを取り出せなかった。 ・戦前の日本も闘鶏を楽しんでいた人が多かったらしい。 （アジアだ、つながっている、同じだ。）

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと ⇒それを何につなげるか？／その他所感
8月4日	サイエンスカフェ	・「多様性の中の統一」をインドネシア人の誇りだと何度も聞いた。インドネシア語がほとんど話せない、私の指示も一生懸命聞き、行動してくれる子供たちにその姿の原点を見た気がする。 ・「支援」とは「無責任にはできない」から、必要性は感じていても避けてきた自分を恥ずかしく感じた。自分ができることを地道に努力している（力みなぎる行動力と溶け込もうとする謙虚さの抜群のバランスがすごい）日本の人たちと出会って、自己を振り返る良ききっかけとなった。 ・村の大人も何らかの形で参加できたら、もっと「つながる」きっかけが増えるように思った。
	ＪＩＣＡボランティアとの意見交換会	・隊員の生活環境の話を聞き、その大変さに驚いた。 ・健康が1番。ジョグジャカルタでは大病を治療できる、信頼のおける病院がないため、ジャカルタまで緊急入院しに行ったと聞くと、安心できる生活の確保は、隊員にも現地の人々にも最優先されることと改めて感じた。
8月5日	ワテス国立第１中学校	・生徒は育ち盛りだから、休憩時間のおやつ許可は健康上必要なのかもしれない。日本も取り入れたらよいと思った。 ・伝統のバティックを伝えるということはとても良い。日本も「ゆかたデー」なんて作ってみたらいいのでは。 ・日本の中学生もインドネシアの中学生も携帯電話に夢中
	スポーツ青年局	・地震で崩壊した体育館の早期再建を心より願う。 ・隊員の日常生活はジャカルタよりはるかに厳しい。 ・現地のスタッフと懸命にコミュニケーションをとろうとしている隊員の姿
8月6日	ボロブドゥール遺跡、プランバナン遺跡	・１９９５年に訪問した時は緑のヤシ林の中にあった遺跡の情緒が薄れてしまった感じがした。「開発」はこれで成功しているのだろうか。 ・プランバナンは世界遺産といえども、地震の復興がいまだ続く。
8月7日	インドネシア事務所報告会	・貴重な経験を無事終えることができたのも、多くの方々のおかげだと感謝 ・表面に見えないところでの安全確保など、スタッフの影の努力に感謝
	ＨＩＭＭＡＴＡの学校・寮	・「幸せ」とは、自分に問い直すきっかけとなった。 ・「心」が通じ合えることの喜び ・日本の生徒に「大切なもの」の答えで「知識」と出てくるだろうか。日本の教育の在り方を再考 ・帰国後、必ずこのスラムの生徒たちにコンタクトをとれる生徒を育て、互いの刺激、支えになれたらいいなと思う。
	スカルノ・ハッタ国際空港（ジャカルタ）	・どこの空港の免税店内ともわからない品そろえ豊富な商業施設と、つい先ほど訪問したスラム街とのギャップはどう考えたらいいのか、自分の中で整理つかず搭乗 ・日本人観光客の多さを実感。インドネシアの人たちに経済効果をもたらしているのか？それはインドネシアの人たちにとって果たして真の発展に結びついているのだろうか。
8月8日	成田空港、羽田空港、伊丹空港	・インドネシアとさほど変わらない景色（同じアジア） ・消費者の安全確保が基本となる社会を大切にしたい。

2-7

学校名　：柳学園中学・高等学校
担当教科：地歴科・中学社会
氏　名　：山中 信幸

1　海外研修について

（１）　良かったと感じた（期待に応えた）海外研修の内容について（上位３つ）

① ＨＩＭＭＡＴＡ（スラム街で活動している現地ＮＧＯプロジェクト現場訪問）
⇒スラムにおけるNGOの活動を見ることができた。そこに学ぶ子どもたちの明るい笑顔に出会えた。

② ボロブドゥール遺跡訪問
⇒開発の問題点を直接目にすることができた。

③ ワテス国立第１中学校
⇒インドネシアにおけるエリート養成教育の現状に、日本の学校における教師の教育活動に見られるものと同質の問題点を見いだすことができた。

（２）　収集した資料／教材について

町や村の写真、絵はがき、コーラン、ハラルマークのついたチキンラーメン、様々な人とのネットワーク

（３）　授業／学校生活への活用について

異文化理解・環境教育・平和教育・人権教育・各教科など、どの分野でも活用することは可能だと思うが、単に３Ｆ（ファッション、フード、フェスティバル）といわれるような文化紹介に終わらないように取り組みたい。

（４）　研修に関する全般的な所感／意見について

①ＪＩＣＡ主催のプログラムなので、ＪＩＣＡが一番見て欲しいところに訪問することになるのは分かるが、私たちの日常生活と密接につながっている合板工場やエビやパームのプランテーションで働く人々にも出会う機会があれば、もっと違う学びがあったのではないか。
②インドネシア大学日本研究センターや生物学研究センターの取り組みからも、いろんな学びはあるが、教材化するには情報が乏しすぎる。
③多様な価値観を持つ人たちの集団をまとめることの難しさを感じた。しかし、最後には参加者全員に変化が生じていたことを実感した。

2　来年度研修へ向けて　～さらに充実した研修のために～

（１）　事前研修

①事前にもっと問題意識や価値観を共有する時間をとり、インドネシアを見る視点を明確にする必要があった。
②事前学習の段階で、「自分にはまだまだ知らないことがたくさんある」、「自分は何らかのステレオタイプに縛られていた。」などに気づく機会を持つことができればよかったと思う。
③授業作りのためのワークショップも事前にすればよかったのではないか。
④「開発」とは何かについて、じっくり考える時間がほしかった。

（２）　海外研修について

①日本に住む私たちの日常とインドネシアとのつながりを、目で見て確認できる場所へ行きたかった。例えば、アルミや合板の工場やパームのプランテーション、エビの養殖場など。

②戦争体験者から当時のお話を聞くなど、日本とインドネシアとの歴史的なつながりも体験的に学びたかった。
③農村を訪ねたとき、半日ぐらいかけて、村の人たちと一緒に参加型地域開発の手法であるＰＲＡ（Participatory Rural Appraisal）の手法を使った村落調査をしてみてはいかがでしょう。

（３） 今後の本研修参加者へのアドバイス

①まずは健康が第一。事前にしっかり体力をつけて、すべてのプログラムに参加できるようにしましょう。
②毎日の振り返りの時間は、一番大切な時間だと思います。どんなに疲れていても、積極的に参加することが大事だと思う。自分たちが何を感じ、何を学んだかをじっくり振り返ることが、新しい学びを生み出すきっかけになると思う。
③人の話を聞くこと。そして自分の意見をはっきり言うこと。そして何より大切なのは、互いの意見を尊重すること。
④事前に、「インドネシアについて」「ＯＤＡについて」「日本とインドネシアとの関係について」などを調べておくこと。
⑤いろんなことに疑問を持ち、好奇心を旺盛に。
⑥精一杯楽しみましょう。

＜参考文献＞

・『エビと日本人』村井吉敬、岩波書店、1988 年
・『ＯＤＡ　援助の現実』鷲見一夫、岩波書店、1993 年
・『日本は世界の敵になる　ＯＤＡの犯罪』浅野健一、三一書房、1994 年
・『日本人の暮らしのためだったＯＤＡ』福家洋介・藤林泰編著、コモンズ、1999 年
・『アジア政治を見る眼　開発独裁から市民社会へ』岩崎育夫、中央公論新社、2001 年
・『概説インドネシア経済史』宮本謙介、有斐閣選書、2003 年
・『インドネシアを知るための５０章』村井吉敬・佐伯奈津子編著、明石書店、2004 年
・『世界から貧しさをなくす３０の方法』田中優・樫田秀樹・マエキタミヤコ編著、合同出版、2006 年
・『インドネシア　多民族国家という宿命』水本達也、中央公論新社、2006 年
・『エビと日本人Ⅱ　暮らしの中のグローバル化』村井吉敬、岩波書店、2007年

3　各訪問先の所感

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと ⇒それを何につなげるか？／その他所感
7月31日	インドネシア大学 日本研究センター	日本は技能実習生としてインドネシアから多くの労働者を受け入れてきた。今また看護師・介護士になるためにインドネシアから200人ほどの人を受け入れた。 しかしその研修生の中には、日本企業によって、劣悪な労働条件で働かされた人々も少なからず存在している。看護師・介護士になるためにやってきたインドネシアの人々にも、日本の労働者不足を一時的に補うために受け入れられたという見方もされている。そういった状況がある中で、インドネシアと日本企業とのよりよい関係づくりについて研究しようとするこの機関の存在意義は大きいと思った。
8月1日	生物学研究センター	熱帯雨林の保護と持続可能な開発は、地球温暖化防止の意味からも大変重要な視点だと思う。 しかし今後、企業がこの研究機関と関係を持ち、企業の利益を生み出すものとして熱帯雨林が利用されはじめたときに、熱帯林の行方はどのようになるのだろうか。
	ストリートチルドレン更正施設	路上で生活するようになった理由が以下のとおりであることに驚いた。 ・友だちが路上で生活していたから ・暇つぶしが習慣化した ・ストリートチルドレングループのリーダーにあこがれて このことはまさに、教育の問題であり、雇用の問題であり、社会構造の問題であるといえよう。
8月2日	インドネシア語教室	短時間ではあったが、インドネシア語だけで簡単な言葉のやりとりをしたことで、その後のホームステイに向けての心の準備ができ、緊張が和らいだ。
	ホームステイ	ホームステイを受け入れることを生計の手段にしている家庭であったので、ホームステイというより民宿に泊まっているという感じがした。 その家の祖父は、日本が占領していた頃、中学3年生で青年団に所属していたらしい。「海ゆかば」を歌って聞かせてくれた。 テレビではインドネシア独立記念番組が放映され、インドネシアのアイドルたちが独立記念日を祝っていた。 その家の子どもは、日本のアニメ「ナルト」の絵を描いた帽子をかぶっている。彼の大好きなアニメなのだそうだ。 ずっと話し相手をしてくれたその家の祖母は、「日本人もインドネシア人も同じアジアの人」だということで、親しみを感じていると言っていた。 しかし、本当にこの国の人々の多くが親日的なのだろうかと疑問も感じた。
8月3日	文化体験教室 「バティック （ろうけつ染め）」	初めてのバティック制作体験。 溶けたロウを使って布に絵を描いていった。その後、染色。余りうまく描けなかったが、静かな日だまりの中で、ゆったりとした時間を過ごすことができた。

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと ⇒それを何につなげるか？／その他所感
8月3日	市場見学・書店	市場は活気があり刺激的だった。時間に縛られず、ゆっくりいろんな所を見て歩きたいと思った。 あの活気が今の日本が忘れてしまったものの一つなのかもしれない。
8月4日	ゲシアン村小学校 日本文化紹介	小学生たちは明るく迎えてくれた。 日本文化紹介は子どもたちを対象にするのではなく、教師を対象にして“ジャパンボックス”を使いながら、日本の問題点・インドネシアの問題点を共有する方がいいのではないか。 （テーマを環境とか格差とかに絞っても良いかもしれません。）
	ホームビジット	通訳の関係で、グループワークをするのは難しいかもしれないが… この村の人たちと話をする時間がもっとあればと感じた。 ただ未熟なインドネシア語をつかって交流をするというだけではなく、ＰＲＡの手法を使って農村調査をしてみたいと思った。
	サイエンスカフェ	支援とは、相手の状況やニーズにあわせてゆっくりと浸透させていかなければならない。支援の現場に直接立った経験のない私には、頭でわかっていても、行動として理解できていなかったということを痛切に感じた。
8月5日	ワテス国立第１中学校	青年海外協力隊員のお話は非常に興味深いものであった。まさに、インドネシアの教師が解決しなければならない問題は、日本の教師が解決しなければならないものと同質のものであった。今後、インドネシアの学校教育における問題をみつめなおすことが、私たち自身の目の前にある問題を解決するためのヒントになるであろうと考えられる。
	スポーツ青年局	私はこれまで、スポーツによる国際協力にどのような意味があるのだろうかと、少々批判的に見ていた。しかし、子どもたちに生きる目標を与え、人と人とのつながりを拡げる、すばらしい活動であることが分かった。
8月6日	ボロブドゥール遺跡、 プランバナン遺跡	歴史的建造物のすばらしさに触れるとともに、日本をはじめとする先進国の援助によってなされた観光開発の現実をかいま見ることができた。 その公園の周辺に住む人々の状況について、もっと深く知りたくなった。 本当にすばらしい建築物だった。プランバナン遺跡は地震による被害が痛ましかったが、それでも厳かな気持ちになった。
8月7日	ＨＩＭＭＡＴＡの 学校・寮	子どもたちの明るさと、それを支える人たちの情熱に心を打たれた。 また、歌手を夢見て、私たちに歌ってくれた子どもたちを守るためにも、日本社会も無関係ではない子どもたちの人権を脅かす様々な問題を解決しなければならないということを痛切に感じた。